

愛の星

2020・第2号(通算164号) 2020年12月22日



社会福祉法人 東京聖ビンセンシオ・ア・パウロ会

愛星保育園

〒108-0074 港区高輪1-27-40

TEL. 03-3441-5410

FAX. 03-3441-5436

E-mail aiseihoikuen@fancy.ocn.ne.jp

https://www.aiseihoikuen.or.jp



園の花(すみれ)

～保育のなかの絵本のチカラ～

創立 60 周年を記念し制作した絵本『あいのほしのおはなし』は、保育者同士や保護者の方々と＜園の心＞を分かち合うなど、私たち保育者に絵本の可能性（＝絵本のチカラ）を改めて考える機会を与えてくれました。また、この可能性を考える過程は、絵本に関わる方々との貴重な出会いも私たちにもたらし続けています。

このような出会いの中で、この度、絵本学研究所主宰の正置友子氏、『あいのほしのおはなし』の作者いもんのりこ氏、『あいのほしのおはなし』を『あいちゃんのまもりぼし』として出版化した至光社の編集担当の小沼みさ子氏、と絵本について語り合う機会を得ました。

今年度の企画号では、絵本学研究、作者、絵本制作、保育、それぞれの視点からみた絵本に対する想いをご紹介します。

皆さんもぜひ色々なく絵本のチカラ＞をお楽しみください。

『愛の星』編集委員

目次

- | | |
|---|-----------|
| ☆ 寄稿者のプロフィール紹介 | P 1 |
| ☆ 絵本の＜とこしえ＞と＜うつろい＞、そして、子どもたちと絵本
(正置友子) | P 2～P 6 |
| ☆ 受け継がれてきた「大切なこと」(いもんのりこ) | P 7～P 8 |
| ☆ 作者の想い・感じる絵本 (小沼みさ子) | P 9～P 10 |
| ☆ いつまでも続く、人と人をつなぐ絵本 (保育士 河合忍) | P 11～P 12 |

プロフィール

正置 友子（まさき ともこ）

元聖和大学教授。絵本学研究所・青山台文庫主宰。

1940 年名古屋生まれ。1965 年結婚と同時に大阪へ。1973 年青山台文庫開設。1994 年～2000 年イギリスでヴィクトリア時代の絵本を研究。ローハンプトン大学大学院に論文を提出し、博士号（PHD）を取得。この論文にて、イギリスの子どもの本歴史協会より「ハーベイ・ダートン賞」を受賞。2001 年～2006 年「戦後 60+1 周年子どもの本・文化プロジェクト」（実行委員長）を立ち上げ、戦前・戦中・戦後の本を研究。2006 年大阪歴史博物館にて「あこのころ、こんな子どもの本があったー戦前・



戦中・戦後の絵本から教科書までー」を展示。2007 年京都国際会館にて、日本で初めての国際児童文学学会（IRSCL）を開催（実行委員長）。2012 年～2018 年、大阪大学大学院にて現象学の哲学者メルロ＝ポンティを研究する。「子どもと本」に関わらせて論文を提出し、博士号（学術）を取得。著書に『A History of Victorian Popular Picture Books』、『イギリス絵本留学滞在記』、『メルロ・ポンティと〈子どもと絵本〉の現象学ー子どもたちと絵本を読むということ』（以上、風間書房）、『保育のなかの絵本』（かもがわ出版）など。訳書に『絵本の絵を読む』（玉川大学出版部）。



井門 典子（いもん のりこ）



慶應義塾大学経済学部卒業。結婚後、東京都品川高等職業訓練校建築設計科修了。一級建築士として設計事務所開業。ボランティアで関わった児童養護施設より創立 70 周年記念の絵本製作を依頼されたことをきっかけに絵本を描き始める。愛星保育園に自身の子どもたちが通っていた縁で、愛星保育園創立 60 周年記念事業として、『あいのはしのおはなし』を制作。この絵本が出版社の至光社の目に留まり、『あいちゃんのまもりぼし』として出版となった。Studio え・ほ・ん 青木正夫氏に師事。



小沼 みさ子（こぬま みさこ）

白百合女子大学児童文化学科卒業

1990 年より至光社編集部にて

月刊絵本「こどものせかい」・上製本絵本の制作に携わる。





絵本の〈とこしえ〉と〈うつろい〉、そして、子どもたちと絵本 —絵本の長い歴史と現在の〈子どもと絵本〉を考える—

正置友子（まさきともこ）

絵本のはじまり

絵本は、いつ始まったのでしょうか。私は、人が洞窟に絵を描いた時ではないかと思っています。ラスコーの洞窟画は約 1 万 5 千年前であり、ショーヴェの洞窟画は 3 万年以上も前に描かれました。描かれた動物たちの絵には、現代の人が描くことができないような躍動感、生命感がみなぎっています。これらの絵は洞窟の中でも奥の暗いところに描かれているのだそうです。すると、洞窟画を描くには、ある人数の人たちが共に働いていたことがわかります。松明（たいまつ）のような明かりを持つ人、絵の具（洞窟画には色彩も施されている）を持つ人、水を運ぶ人、筆などの画材を運ぶ人などです。この中には、絵を描く才能（技術）を持った人もいたでしょう。

集団の行動ができるということは、言葉を共有しており、絵を描く時には、感情あるいは言葉を表現しつつ、絵を壁画に描いたと思われます。文字はまだ生まれてはいなかったもので、絵と共にある〈言葉〉は、そこにいる人々のなかに、祈りや願いのような思いとして内面化されていたと言えます。

興味深いことに、ある洞窟画の前には、座れるようにいくつかの石が置かれているところもあり、子どもたちを教育する学校として使われたのではないかという説もあります。すると、そこには教師の役割のおとながいて、子どもたちを前にして絵について語っている光景が浮かび上がってきます。〈言葉〉を使って、〈絵を読む〉という行為がされていたのです。

人類は、〈絵〉で表現したいという欲求を持ったのです。それは、幼い子どもたちが、言葉も自由にはならない 1 歳や 2 歳に、鉛筆やクレヨンを持って、ぐるぐると線を描き始めるのと似ているとも言えます。しかし、人類の最初の、少なくとも残存している絵は、生命の躍動と輝きがあり、何が描かれているか、現代の人間にもわかるものであり、さらに言えば、現代の人間は、その生命感を表現する力を失っているのではないかなと言えることです。

現代の絵本に繋がる、絵本のはじまり

日本の絵巻は、絵本の始まりと言えるでしょう。美術館では、絵巻を巻き戻して、何メートルもならべて展示していますが、絵巻はおよそ 60 センチを 1 場面としていました。おとなの肩幅の長さで、左手で繰り出し、右手で巻き取って、60 センチくらいに広げて、絵を見、詞書（ことばがき）を読みました。絵巻は 8 世紀くらいから始まり、最盛期は 11 世紀から 13 世紀にかけてであり、源氏物語絵巻を始めとして多くの優れた絵巻が作成されました。料紙と言われる用紙自体が芸術品である紙媒体の上に当時の画家によって描かれました。1 点ものです。絵巻の場合は、絵と詞書が交互に配置されているもの、同一場面に配置されているもの、詞書をもたないものがありますが、共通していることは、絵が物語る要素が強いということです。日本文化のもつ絵で物語る—絵を物語として読み取る—という楽しみ方が、現代のアニメへと繋がって行きます。





一方、西欧には、中世彩飾写本の歴史があります。5 世紀から 15 世紀にかけて、主に修道院などで制作されたもので、高価で美しい写本は、ヴェラム（子牛・子羊などの皮をなめして作った皮紙）に手書きされました。1 点ものです。テーマは主に聖書から取られ、文字とミニチュアールと言われる絵と装飾（イルミネーション）から成り立っていました。このミニチュアール部分が、ルネサンス期に絵画として独立して行きます。中世彩飾写本は、ロンドンの大英図書館を入ったところにある展示室に多く展示されています。質量ともに見応えがあり、しかも無料です。

こうして東西の絵の歴史を見ると、始めは、絵は言葉（文字）と結びついていたことがわかります。

その後、絵本の歴史は、木版などで、より多くの人に楽しんでもらえる大衆化への方向に進みます。従って、最盛期の絵巻や中世彩飾写本のような豪華さはなくなり、大量生産へと向い、素朴な、しかしそれなりに味わいのある複製品が出回るようになります。

現代の絵本のはじまり

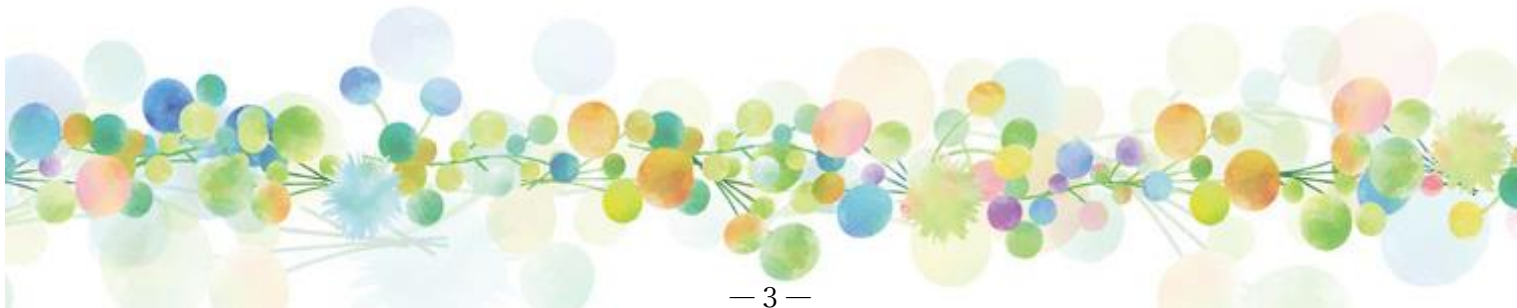
日本の場合は、江戸時代に、高度な職人技の木版による浮世絵が出ますが、1 枚ずつの彫りと刷りであったため、何枚かを閉じた一冊の絵本としての、内容としても製品としても優れたもの、とりわけ色刷りの絵本が出回ることにはついに起こらなかったのは残念です。

イギリスのヴィクトリア時代に、現代絵本へと繋がる＜絵本＞の花が開きます。優れた印刷師としての腕前をもち、しかもアートディレクターとしての美的感覚をもったエドモンド・エヴァンズの登場と、若いイラストレーターであるウォルター・クレインの協働作業によって、現代へと通じる印刷複製絵本の時代への門が開きます。1865 年頃です。日本では、明治維新の少し前です。

現代を代表する絵本作家であるアメリカのモーリス・センダック（1928－2012）は、イギリスのヴィクトリア時代（1837-1901）について次のように語っています。

私はこの時代〔ヴィクトリア時代〕についてこう思うのです。エネルギーが燃え上がるように噴出した時代であったと。まさにこの時代に、芸術と才能と経験がそこにあり、すべてが一同に結集し、爆発した時代であったと。

今日、私たちは上等の印刷機械を持っています。私たちは、エヴァンズが知っていたよりもっと多くのことを知っており、エヴァンズよりもっと多くのことをすることができます。しかし、職人の技が欠如しているように思われます。その結果、現代の本の多くはまがいものめいて見えます。要するに、そこには愛情は籠っておらず、ただ製造されているからです。¹





現代の絵本

現代の絵本は、上記したセンダックの嘆きの延長線上にあると言えるでしょう。印刷技術はセンダックの時代よりもっと進化しています。絵本の色彩は、もっと鮮明になっています。にもかかわらず、ただ製造されているだけで、愛情が籠っていないように見える絵本も出回っています。

そして、絵本作家の中には、始めからデジタル技術で描く人たちも登場してきています。近い将来、絵本の原画がなくなる時代が到来するでしょう。紙媒体の絵本ではなく、デジタル絵本の時代がくることも時間の問題かもしれません。ただむやみに製造される絵本ではなく、まがいものではなく、心を込め、愛情を込めて、丁寧に作り出される絵本であってほしいと願わずにはいられません。

絵本の歴史を大まかに見れば、始めは限られたほんの少数の人たちのものとして制作された時代から、より多くの人たちに手渡されるという絵本作りの歴史があります。この歴史に大きく関わったのが、産業や経済です。より多くの人を読むものを求めるようになったのは、ヴィクトリア時代や江戸時代です。特にイギリスの場合は世界でいち早く産業革命を迎え、汽車の発明と線路の拡充により、物を遠くに大量に運べるようになり、印刷技術も高まり、本や絵本の大量生産が可能になりました。日本も明治期に絵本の印刷の機械化が起こり、それまでの木版制作よりも質的に非常に劣るものが出回るようになりました。しかし、その後の印刷技術の向上により、第二次世界大戦後、岩波書店が1953年に「岩波の子どもの本」を、至光社が1955年に「こどものせかい」を、福音館書店が1956年に「こどものとも」を、と絵本の出版を開始し、日本の絵本作家が育ち、海外の絵本の翻訳紹介もあり、日本の絵本の質が向上し、今では、日本は絵本文化では世界一の豊かさを誇っています。

絵を通して物語を読むという伝統を持つ日本では、自国の絵本生産が質量ともに豊かであり、他の文化圏の絵本もかなりの量が翻訳出版されているからです。私たちは、その中から責任を持って選び出した絵本を、子どもたちに手渡し、いっしょに＜絵本の扉をひらく＞ことが大事です。

すなわち、絵本は、長い歴史を持ち、＜とこしえ＞に続くものですが、絵本の作成の仕方や内容は、その時代から生じる＜うつろい＞を表しているということです。どのような絵本であろうと、その時代・社会の中から生まれたものであると言えます。そのこと自体は＜うつろい＞ですが、優れた絵本は、そのテーマと描き方に、時代を超えた＜とこしえ＞性を内包しています。子どもたちは、未来に生き、未来を創造する役割があること、その意味では、子どもに関わるおとなもまた歴史を動かす役割を担っていることを意識する必要があります。





絵本とはなにか

＜絵本とはなにか＞という問いにたいして、決定的な答え、定義はないと言えるでしょう。それは、＜美術とは何か＞とか＜哲学とはなにか＞という問いに対して、これで決まりという定義はないのと同じです。それでも、なんとか、答えようとする、次のようになるでしょうか。

絵本とは、言葉（文学・言語表現）と絵（美術・視覚表現）からなり、めくっていくこと（時間経過）から物語が生まれるトータル・デザインであり総合芸術である。幼い子どもたちが生まれて初めて出会う文化財であり、小中高の学校時代にも、おとなになっても、命尽きる時まで享受することができる芸術である。優れた絵本は、文学、美術、その他の芸術と同様、生きるための芸術である。そして、絵画（美術作品）は1点物であり、手に入れることは困難であるのに対して、絵本は複製作品であり、手に入れることは容易であると言えます。

絵本は値段が高いと言う人もいますが、1冊の絵本が、親から子どもへと声に出して読んだ上での贈り物となった場合、その子にとっては親への思いと共に、一生の抱きしめたい＜宝物＞となります。さらに、次の世代へと贈られるかもしれません。このように考えると、抱きしめたい絵本は、紙媒体で、表紙から裏表紙まで、その大きさから判型、画材、絵、言葉、テーマまで、心を込めて作られた1冊の絵本であってほしい、と願わずにはられません。そこに絵本の＜とこしえ＞性があります。

幼い子どもたちと絵本を読むということ

絵本の一番の特徴は、絵本は言葉と絵から成るということです。本文の中には言葉がない場合もありますが、タイトルは言葉から成り、内容を言葉化する方向性を示しています。

さて、この当たり前に思われている、＜言葉と絵＞ですが、たいていのおとなは＜言葉＞に集中し、＜絵＞をじっくり見る人は少ないようです。これは、絵は見ればわかると思われているからです。一方、おとなに言葉を読んでもらって絵本に見入っている子どもたちは＜絵＞をよく見ています。50年間、子どもたちと絵本を読んで来て、子どもたちがどれほどよく絵を見ているか、あるいは、言葉を耳で聞いて＜絵本＞をよく見ているかがわかりました。私にとって、絵本の世界の深さ、豊かさを教えてくれたのは、子どもたち、それも、乳幼児期の子どもたちでした。

子どもたちと絵本を一緒に読んで、子どもたちの表情や姿から教えられたことは、子どもたちは、絵本の中の主人公になり、絵本の世界で生きているということです。おとなは、文字が読めるために、文字だけを読んで、絵本を読んだ気になっているものの、絵本の世界で生きるまで絵本の世界に入っていないようです。

ここで、おとなの方々にお願いします。どうぞ、子どもたち＜に＞絵本を読むという態度ではなく、子どもたち＜と＞絵本を読むという心持で、絵本を読んでみてください。すると、乳幼児期の子どもたちの感性の強さ、豊かさに圧倒されます。教えられます。おとなは長い人生を生きてきたから、それなりの経験をしています。しかし、感性や想像力を失って生きているのだと教えられました。子どもたちと絵本を読むということは、おとなも子ども時代をもう一度生きることができることであり、子どもたちから感性をもらうことでもあると思っています。





おわりに

私は、今年（2020年）、80歳を迎えました。50年間、わが子や孫、そして青山台文庫の子どもたちと絵本や詩や物語を読んできましたが、これからも地域の幼い子どもたちと絵本を読み続けたいと思っています。²

私の前に、1歳や2歳や3歳の子どもたちが坐っています。私は、絵本を手を持ち、絵本のタイトルをゆっくりと読み、それから次に何があらわれるだろう、どうなるだろうと、子どもたちとドキドキしながらページをめくっていきます。

ページを開けた途端、何かを見つけて、指を突き出しながら飛んでくる子どもたち。テントウムシであったり、アリであったりします。ある時は、初めて<色>に気づき、「あ」と言いながら赤い色が塗られている個所を指さします。「ち」と言いながら黄色を指さします。見つけたのが嬉しくて嬉しくて、私に教えてあげなければと飛んでくる。初めて出会った感動を自分で表現したいし、誰かと分かちあいたいから指さしをするのです。

3歳半を越したくらいに、『おおかみと七ひきのこやぎ』を読んでもらった時、描かれている絵本の世界の恐さに耐え、眉間に皺をよせ、膝に置いた握りこぶしを強く握って、ひとりで絵本の世界で生きる姿に、私は、震えるほどの感動を覚えます。そして、言うことができます。人生最初の5年間で、その後の長い人生を支える、と。

現実の世界と紙一重のところに想像の世界があることを、子どもたちは絵本を通して知ることができます。生きていくためには、現実世界と想像世界の両方が必要であること、現実世界だけでは、豊かな人生を生きることはいできないし、生きていくことすらできないでしょう。

また、絵本の世界は、あまりにも豊かで深く、まだまだ研究して本として纏めたいテーマがいくつかあります。これまでに、ヴィクトリア時代の絵本、哲学者のメルロ＝ポンティに導かれて考察した子どもと絵本の世界、日本の絵本千年の歴史、幼い子どもたちと絵本などについて考え、書いてきましたが、これから、生きるための絵本、アメリカの絵本の歴史、戦前・戦中・戦後の絵本などについても研究を深め、執筆したいと考えています。

私が絵本に関してしてきたこと、したいことを纏めてみると、絵本の歴史と、現実に目の前にいる子どもたちのことを考える中で、絵本の本質、あるいは生きることの本質の<とこしえ>性を抽出して子どもたちに伝えることであり、その時代や状況の中で、時の権力や制度や流れが押しついたり、気づかないうちに浸透させている<うつろい>を見つけだして、要注意として顕在化させることである、と言えるかもしれません。

私の原点は、子どもたちと絵本を読むということ、多くの人たちに絵本を伝えるということ、にあります。子どもたちと絵本を読む、伝えるということは、未来に希望をはぐくむことであり、子どもたちに未来へと希望の松明を手渡すことでもあります。

注

¹ Cott, Jonathan, (ed) ‘A Dialogue with Maurice Sendak’, in *Victorian Color Picture Books* (London: Allen Lane, 1984), p. xx. (日本語訳は執筆者の試訳)

² 青山台文庫は、1973年に、大阪府吹田市の千里ニュータウン内でオープンし、今も開設中です。





受け継がれてきた「大切なこと」

井門 典子（いもん のりこ）

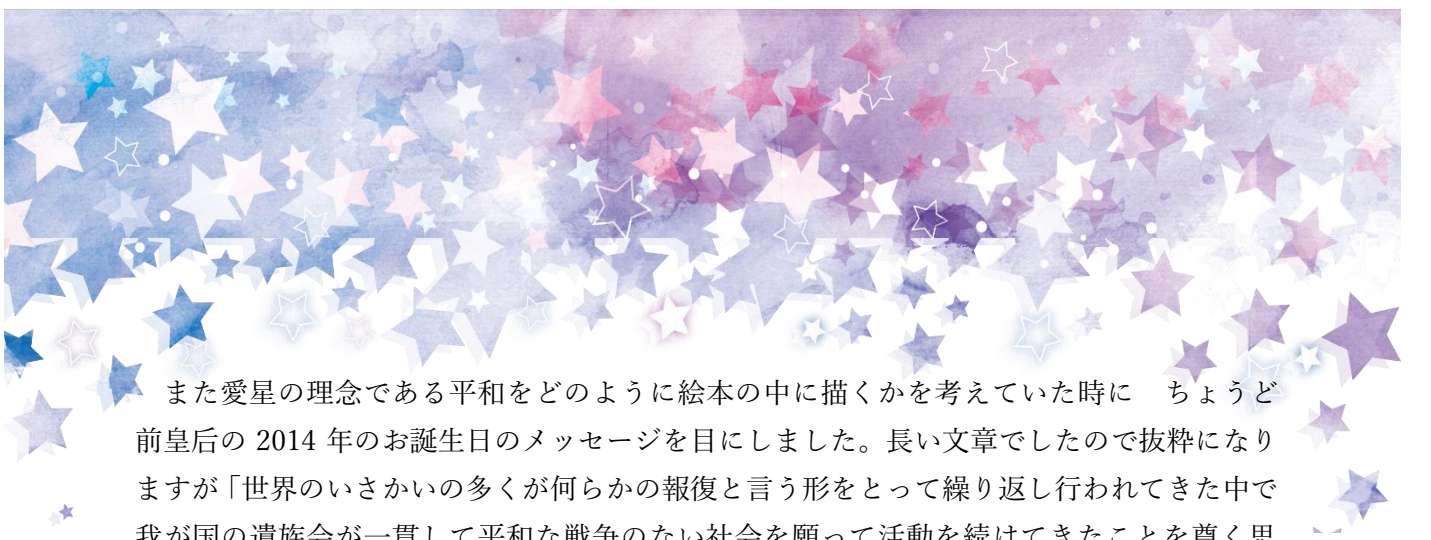
昨年 至光社より『あいちゃんのまもりぼし』という絵本を出版させていただきました。この絵本は愛星保育園の創立 60 周年記念の絵本を描き直したもので 主人公の「あいちゃん」が通っている園は愛星保育園がモデルです。さらに昨年 10 月に出版記念講演会という形で皆様にお話しをさせていただく機会をいただきました。今回「愛の星」に文章を書かせていただくことになり その時の講演会でお話ししたことを 拙いながら文章にさせていただきました。

私の二人の娘が以前 愛星保育園に通っていた頃 娘たちだけでなく 私にとっても 愛星保育園は心の拠り所でした。創立 60 周年記念絵本を描くにあたり 園の設立の経緯や教育理念について書かれた冊子を読み直した時 その理由に納得が이었습니다。愛星は戦後まもなく子供たちの幸せと平和な未来を願うカトリックの学生さんたちの ボランティアから始まった保育園であること。「人々の持つ多様な価値観を尊重しながら…正義・平和・いのちが尊ばれる社会の実現をめざし…一人一人が持つ天からの贈り物を育む心の育ちを支援することに徹します。」(2008 年度園の事業計画前書きから抜粋) という教育理念。その基盤があったからこそ 愛星の保育が生まれたのだなあと 改めて感じました。

どのような物語にするか考えていた時に 村岡園長先生から いつでも園では「みんなは一人ぼっちではない。みんなにはみんなを守ってくれる神様が必ずいてくださる。」と子供たちに話されているということを伺い 小さなのんびり屋さんの「あいちゃん」とかわいらしい「まもりぼしさん」を主役にした物語が浮かんで来ました。

絵本の中の出来事の多くは 実際に見学させてもらった時の園の子供たちの日常の様子や我が子が小さい頃 実際に体験して話してくれたことがもとになっています。

出版にあたり 至光社の武市社長から子供たちの「お守り」になるような絵本にしたいとお声掛けいただきました。親としては 我が子が幸せな人生を歩めるように 様々なお守りを持たせてあげたいくなります。一芸に優れた才能や学力など いろいろなお守りを…そして思い通りにいかず却ってストレスになることもあるかもしれません。でも 多分親が子供に持たせてあげることができる最大のお守りは その子自身が「自分は守られているんだ」と信じることができる 強い心だと思います。長い人生をやがて一人で生きてゆく中で 大きな困難に出会った時 その子を最後に守ってくれるお守りは その子自身の自分を信じる心の強さのように思います。



また愛星の理念である平和をどのように絵本の中に描くかを考えていた時に ちょうど前皇后の 2014 年のお誕生日のメッセージを目にしました。長い文章でしたので抜粋になりますが「世界のいさかいの多くが何らかの報復と言う形をとって繰り返行われてきた中で我が国の遺族会が一貫して平和な戦争のない社会を願って活動が続けてきたことを尊く思います。(中略) 今、平和の恩恵に与っている私たち皆が 絶えず平和を志向し 国内外を問わず 争いや苦しみの芽となるものを摘み続けてゆくことが大切ではないかと思います。」というメッセージでした。

小さなあいちゃんのように「お友達の良いところをみつけてみたら仲良くなれた」という原体験が心のどこかに残っていることが その子たちが成長して社会の担い手となった時に相手の立場を理解することを頭から放棄する不寛容な選択をしない、報復を繰り返す愚かな選択をしない、絶えず争いや苦しみの芽となるものを摘み続ける 忍耐のいる努力を積み重ねていける社会を作っていくてくれますように。愛星の理念である「正義・平和・いのちが尊ばれる社会の実現」につながりますように。それが この絵本に込めた小さな祈りです。

そして どうしてあいちゃんはお友達の良いところをいっぱい見つけることができたのかな？と考えるってみました。もしもあいちゃんが いつも周りの大人から「あなたは何でいつもこんなに遅いの！」と怒られてばかりいたら あいちゃんからは決してお友達の良いところを見つけようという発想は出てこなかったと思うのです。人はそれぞれ欠点を抱えていますが その欠点を含めて 少なくとも小さい時には 自分のことを点数で評価する大人ではなく 絶対的に愛してくれる人たちに囲まれていたから 自分もお友達の良いところを見つけれられたのかな・・・と思います。

そして それが あいちゃんの心の強さとなり 人生のお守りになってゆくとしたら 本当のあいちゃんのまもりぼしは 遠いお空にあるのではなく 小さな子供たちの周りにいる 私たち大人一人一人なのかもしれません。

2020 年は誰も予想もしていなかった困難な年になってしまいました。子供たち 保護者の方々 先生方もいろいろな大変な状況にあるのではないのでしょうか・・・そんな中で改めてもしかしたら今より更に困難な時代だった 戦後間もない頃 愛星保育園を設立した方々の教育に対する理想は きっと今も変わらない「大切なこと」のように感じます。

そして どれほど素晴らしい理想でも 長い年月受け継いでゆくことは 決して楽なことではなく きっと忍耐のいる不断の努力が必要だったことと思います。関係者の皆様の不断の努力があってこそ 受け継がれてきた「大切なこと」。もしもこの小さな絵本が 愛星保育園が大切にしてきた理想を これからも受け継いでゆくためのささやかな力になれば こんな嬉しいことはないと思っています。

作者の想い・感じる絵本

—0 歳から 100 歳までのすべての子どもたちへ—

至光社 小沼みさ子

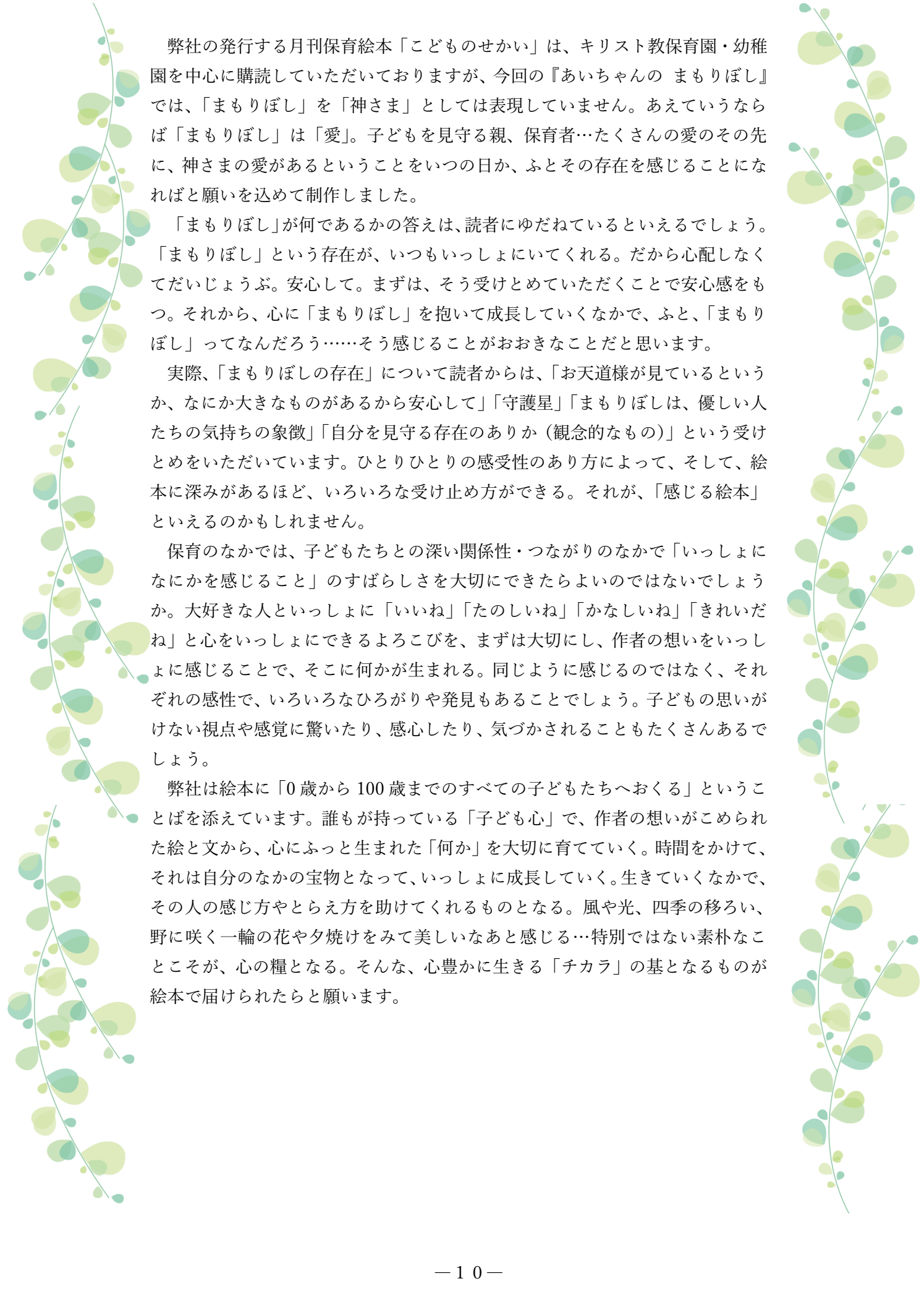
愛星保育園の創立 60 周年記念として作られた『あいのほしのおはなし』（絵と文・いもんのりこ）は、子どもたちへの園からのメッセージが、通園児の親であった作者の想いをこめて描かれており、「あなたたちの幸せをいつも願っている」という子どもたちの成長を見守る愛が、しっかりとした地盤になっています。私たちはそこに深く共感し、このメッセージを届けたい、子どもたちのお守りになるような絵本にしたいと制作ははじまりました。

一般書籍化にあたり、原書の空気感を大切にするなかで、導入の愛星保育園の説明をなくし、主人公が転園する日の不安な場面から、毎日の生活のなかの不安や心配という身近で共感できる場面に変更、後半に主人公が園生活でまもりぼしの見守りの中で成長してゆく時間経過の場面の挿入、ラストの終わり方についてなど、作者の想いを確かめながら、どう表現すればよいかを話し合うなかで、丁寧に気持ちを込めた 1 枚 1 枚の絵が描かれました。

特に時間をかけたラストの見開き、まもりぼしからの主人公へのメッセージの場面は、話し合いが重ねられました。「まもりぼしさんはどこにいるのか」の主人公の問いに、原書は「こころのなかだよ」とまもりぼしが答えますが、より作者の想いを表現するには、「まもりぼしは、いつもいっしょにいる」「ずっとわすれないでね」ということばと、説明ではなく、まもりぼしがそばにいるという感覚、いつもあなたの幸せを願っている、あたたかい光のなかで守られている、あなたは愛のなかにいる（親、保育士、そして神さまの愛につながる）、ということを描いて表現してほしいという提案に、作者は見事に応えてくれました。

そして、作者のあとがきでもある最後の 1 枚の絵は、ランドセルを背負った子がひとりで遠くへと続く道を歩いていく後ろ姿。園を巣立ち、これからいろいろなことが待っているであろう子どもたちの幸せを祈る親・保育士たちの想いを感じると同時に、愛につつまれた生活のなかで培われた「生きる力」をしっかりと心に抱いて、自分の足で歩いていく子どものおおきく成長した姿に、子どもが自らの内に秘めている強い力を感じずにはられません。この絵と作者のことばで、絵本『あいちゃんの まもりぼし』は完成したといえるでしょう。

「まもりぼし」とはいったい何なのでしょう。読者はどうとらえるのでしょうか。愛星保育園は戦後カトリック教会に集う学生達のボランティア活動の子供会からはじまっており、園の歌でも「愛の星に守られて」と歌われています。そして「神さまはいつもいっしょにいてくださる」「みんなの心のなかに神さまがいる」と園生活で子どもたちに伝えています。園の先生方の子どもを想い伝えられることばで、子どもたちの心に育っている神さまの存在によって、より「まもりぼし」をしっかりと感じられることでしょう。



弊社の発行する月刊保育絵本「こどものせかい」は、キリスト教保育園・幼稚園を中心に購読していただいておりますが、今回の『あいちゃんの まもりぼし』では、「まもりぼし」を「神さま」としては表現していません。あえていうならば「まもりぼし」は「愛」。子どもを見守る親、保育者…たくさんの愛のその先に、神さまの愛があるということをいつの日か、ふとその存在を感じることにできれば願いを込めて制作しました。

「まもりぼし」が何であるかの答えは、読者にゆだねているといえるでしょう。「まもりぼし」という存在が、いつもいっしょにいてくれる。だから心配しなくてだいじょうぶ。安心して。まずは、そう受けとめていただくことで安心感をもつ。それから、心に「まもりぼし」を抱いて成長していくなかで、ふと、「まもりぼし」ってなんだろう……そう感じることをおきなことだと思います。

実際、「まもりぼしの存在」について読者からは、「お天道様が見ているというか、なにか大きなものがあるから安心して」「守護星」「まもりぼしは、優しい人たちの気持ちの象徴」「自分を見守る存在のありか（観念的なもの）」という受けとめをいただいています。ひとりひとりの感受性のあり方によって、そして、絵本に深みがあるほど、いろいろな受け止め方ができる。それが、「感じる絵本」といえるのかもしれませんが。

保育のなかでは、子どもたちとの深い関係性・つながりのなかで「いっしょになにかを感じる」ことのすばらしさを大切にできたらよいのではないのでしょうか。大好きな人といっしょに「いいね」「たのしいね」「かなしいね」「きれいだね」と心をいっしょにできるよろこびを、まずは大切に、作者の想いをいっしょに感じることで、そこに何かが生まれる。同じように感じるのではなく、それぞれの感性で、いろいろなひろがりや発見もあることでしょう。子どもの思いがけない視点や感覚に驚いたり、感心したり、気づかされることもたくさんあるでしょう。

弊社は絵本に「0歳から100歳までのすべての子どもたちへおくる」ということばを添えています。誰もが持っている「子ども心」で、作者の想いがこめられた絵と文から、心にふっと生まれた「何か」を大切に育てていく。時間をかけて、それは自分のなかの宝物となって、いっしょに成長していく。生きていくなかで、その人の感じ方やとらえ方を助けてくれるものとなる。風や光、四季の移ろい、野に咲く一輪の花や夕焼けをみて美しいなあと感じる…特別ではない素朴なことこそが、心の糧となる。そんな、心豊かに生きる「チカラ」の基となるものが絵本で届けられたらと願います。

保育の中の絵本のチカラ ～いつまでも続く人と人をつ結ぶ絵本～ 膝の上で絵本の読み聞かせ ～保育者と子どもを幸せにする力～

愛星保育園 保育士 河合 忍

絵本は保育者にとって身近な物であり、すぐ手に取れ、読み聞かせができる教材であります。「子どもが喜ぶから」「子どもが楽しむから」という理由で、なんとなく絵本を読み聞かせすることが保育現場では多いと感じます。「これ読んで待っていて」と待ち時間に使うこと、活動のつなぎで読み聞かせをすることも日常保育の現場ではあります。どうやって関わればよいか分からないという保育者もいます。絵本には素晴らしい沢山の力があるということを知り、学ぶことで、絵本の読み聞かせをする時、手に取る絵本、保育室に置く絵本も変わります。絵本は「待ち時間」で使用する物ではありません。絵本を通じて心を通わせることが何より大切だと考えます。

見て触れて触って ～五感が育つ絵本の力～

赤ちゃんは「絵本」というものを最初は絵本として認識しません。なめる・かじる・破く等興味を持ち、保育者が膝の上に乘せ絵本を読むことで「絵本は見るもの」と少しずつ覚えていきます。

絵本を通して、色や形「きれい」「かわいい」「うれしい」等感じる心が育ち、様々な絵を見ることで興味関心も広がります。読み聞かせて大好きな大人の声を聞くということは、子どもに様々な刺激を与えるとともに安心感を与え、さらに言葉の獲得につながります。紙の手触り・厚み・重み・めくるという体験では感触を、そして、紙のにおい・読んでくれる大人のにおい、絵から感じられる（イメージされる）においもあります。時にはかじる・なめる等絵から感じられる味覚もあります。こうして、目・耳・手・鼻・口と五感を研ぎ澄まし、様々なことを感じ成長を促します。

現在スマホ等で絵本の読み聞かせアプリがあります。デジタルから流れる声を聞き、画面には次々に絵が流れていきます。大人はスマホ等で子育てをすることは「楽」ですが、電子機器が子どもの発達に及ぼす影響は現在問題視されています。大人が絵本を手にとって読み聞かせをすることで子どもの呼吸に合わせて、一緒にめくる、ページをめくってもまた戻すこともできます。絵本は子どもの五感を育てる力があり、人として生まれもった「感じる心」を育むことにもつながると考えます。

愛星では、言葉と行動が一致し始めた頃に、人として生まれもった「感じる心」を育むこと（情操教育）や「言葉の発達を促す」という事をねらいとし、一人ひとりが自由に絵本を手にとれるよう保育室の環境を整えながら、保育者が一対一で膝の上で絵本の読み聞かせを行います。絵を見て子どもたちは様々なことを感じ心が躍ります。「かわいい」「楽しい」「これ見たことある！」言葉では伝えられなくても表情を見ていると「ワクワクドキドキ」が伝わってきます。絵を見て感じたことを共感すると、読み聞かせをしているうちに、保育者も「幸せ」な気分になってきます。お母さんが赤ちゃんに母乳をあげ、赤ちゃんが見つめあいながら心も体も満たされている時に「オキシトシン」という幸せホルモンが出ると言われていますが、そのような感覚に似ていると感じます。オキシトシンは未だわからないことがたくさんですが、日々のストレスを緩和し、私達に「幸せな気分」をもたらしてくれると言われています。子どもと大人のこのような時を一瞬一瞬大切にしたいものです。

愛星保育園の絵本の取り組み ～人と人をつ結ぶ絵本の力～

当園では至光社の月刊誌「こどものせかい」を育児・家事・仕事と忙しい毎日を送っているご家庭に、少しでも親子の時間を大切にしてほしいというねらいをもって毎月無料配本しています。一人一人名前を書いて「自分の物」として家庭へ持ち帰ります。この「自分の物」がとても大切です。子ども達は「帰って帰ったよ」と嬉しそうに保護者に渡します。

家庭へ配本する前に園でも各クラス年齢に合わせ読み聞かせをします。0歳児の子ども達と絵本「だ

いじなものがない」を読んだ時に表紙の絵を見て「わんわん」と指さして嬉しそうに保育者に知らせました。そしてページをめくるたびに様々なキャラクターを「わんわん」と言って知らせます。このことを家庭へ伝えると「先生、全部わんわんって言うのですが、本当にすべてが犬に見えてきて違った面白さがありました。」と保護者から感想がありました。子どもが絵を見て感じる絵本は大人の感性も磨かれます。園と家庭とが絵本でつながった瞬間でもありました。

A 君(1 歳)のお父さんは家庭で絵本の読み聞かせをしていました。悩みは「聞いてくれない」「ぺらぺらめくって読めない」ということでした。このような姿がある時、絵本に興味がないのかな？と感じ「読み聞かせ」をやめる保護者や保育者は多いと思います。でも、お父さんは毎月配本される絵本を手に取り読み聞かせをしました。膝の上に乘せ絵本を手に取り対話をしたこと、繰り返し父親とのスキンシップ(愛着を育むための触れ合い)、慈愛に満ちた触れ合いを繰り返し経験することで、A 君はお父さんの「絵本の読み聞かせ」に興味を持ちました。絵本には親子のかけがえのない時間をもたらす力があります。園でも A 君の姿に変化がありました。絵本を破く・投げるなどしていたのですが、絵本という物の認識を少しずつ得て、保育者の膝の上に座る心地よさ、大好きな人の声を聴きながら絵本を見る楽しさを感じるようになりました。興味のある絵があると「お・お」と指差しをし、先生これ見て僕これ大好きと教えてくれているようです。また、同じクラスの友達二人が保育者の膝の上に座り絵本の読み聞かせをしていると、側に来て「お・お」と膝と一緒に座らせてと訴えてきます。友達に「いや」と断られると、読み聞かせをしている絵本をわざとぺらぺらとめくる・絵本を取って投げる等「ヤキモチ」の行動が見られます。「そうだよね。一緒に読みたいよね。」と伝えるとうんうんと頷く A 君。保育者が「A 君もお膝の上で読みたいよ」と友だちに伝えると膝のスペースを開けてくれ三人膝の上に座って絵本の読み聞かせをすることができました。お父さんと A 君の絵本を通して愛着を育む触れ合いから、保護者、保育者、友達と人と人をつなぐ絵本の力を感じました。A 君のお父さんに「お父さんが A 君との読み聞かせを繰り返し大切にしてきたことで、喜んで保育者の所へ絵本を持ってきて読んでと言ってくれるのでとてもうれしいです。」と伝えると、お父さんからは「保育園で繰り返し読んでくれているから、家でも絵本を読んでと持って来るのだと思っていた。」とお話がありました。絵本によって保育者、保護者、子どもの信頼関係や愛着関係が一層深まりました。

絵本『あいのほしのおはなし』～絵本の力を信じて～

絵本『あいのほしのおはなし』は60周年を記念し卒園児の保護者、井門さんのご協力により作成したものです。入園説明会で配ったこの絵本を手にした保護者から「愛星がどのような園なのかかわからず不安でしたがこの絵本がたくさん私に教えてくれ、安心して入園を迎えることが出来ました」とお話がありました。お子さんと一緒に読み聞かせをし、入園を楽しみにしてくださったようです。

その後、一般向けに至光社から絵本『あいちゃんのまもりぼし』が発売されました。それを読んだ年長児が「この絵ね、大好きなの。小学校へ行ってもお友達いっぱいできるよって言っているね。」と言いました。絵本にはそう書かれていません。しかし、その子はそう感じたのです。また、卒園生がこの春就職しますと挨拶に来た時にこの絵本を渡すと、その場でじっくりと読み「わたしにも守り星さんいるかな」と言いました。社会人になる不安があったのでしょうか。大丈夫いつもあなたには守り星さんがついています、今までもずっとあなたには守り星がついていましたよと励ましました。手渡すだけでなく私が読み聞かせをしたら、もっと励ましのメッセージが送れたのではないかと感じた瞬間でした。子どもだけでなく、大人にも勇気と希望を持つことをこの絵本を通して教えてもらいました。子どもが絵本に出会いその絵本が一生の宝物になることさえありうるのです。

絵本の力を発揮できるよう、読み聞かせの絵本をしっかりと選定し、丁寧に読んであげることがとても重要だと考えます。「人と人とを結ぶ絵本」これからも絵本で沢山の保護者、子どもとの関りを大切にしていきたいと思います。